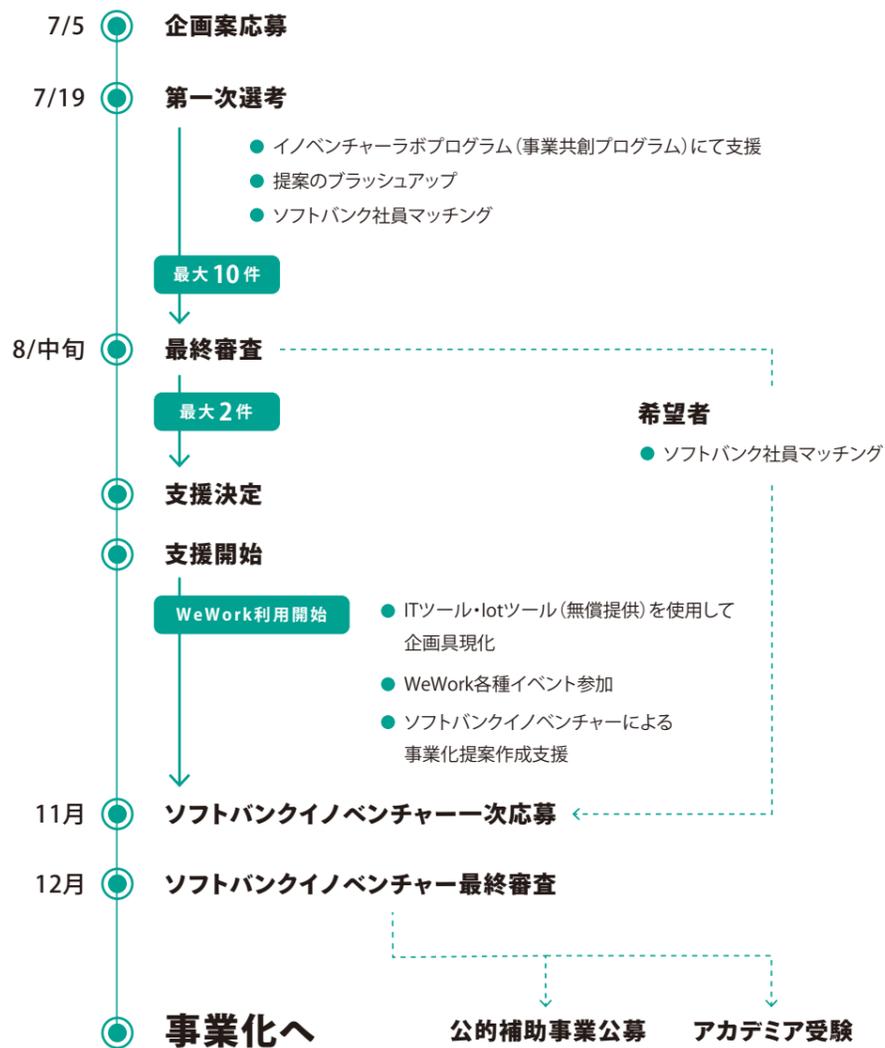


広島発の新事業の創出を目指す

Innoventure チャレンジ

ひろしまサンドボックス推進協議会会員の新規事業アイデアをソフトバンクと共に事業化する「ソフトバンクイノベーション」への応募を目指すプログラムです。

マイルストーン



チャレンジャー ● 水みらい

「水みらい広島」は、広島県が35%、呉市が3%、水・環境の総合事業会社「wating」が62%出資した、日本初の民間主体による水道事業運営会社。公民の強みを融合させることで、国全体が抱える「収益の減少」、「設備の老朽化」、「技術者の減少と技術力の低下」といった課題を解決し、水事業を持続可能な形で次世代へ引き継いでいくために貢献することを目指している企業である。その目的実現の一つの方法として、同社がひろしまサンドボックスに挑戦した背景と現在について話を伺った。

チャレンジの源はインフラを担う企業としての使命感

県からの案内で本事業のことを知ることになりました。その経緯の中で、応募の決め手となったのは、ひろしまサンドボックスという事業は、プロジェクトを支えてくださるメンバーに恵まれており、採択後のプロジェクトに広がり期待できるというメリットを感じたためです。水道の事業においては、他の生活インフラ事業と比較すると、IoTといった最新技術の導入が少し遅い傾向にありました。一方で「水」は生活に欠かせない非常に重要な要素であるということを考えると、AIやIoTを活用する技術の導入は待たなしの状況であると言えます。そういう観点から当社では既に新しいプロジェクトを幾つかスタートさせていました。その中でも、今回の提案したプロジェクトは「通信」技術がキーになるものであり、このコラボレーションに参加することが理想的であると考え、応募することにしました。

弊社の社長は新しい技術に明るく、提案に向けての準備もスムーズに進みました。やはりトップの理解は大変重要なポイントです。そして日進月歩の技術分野において、イノベーションは若い世代が起こすものだと思っておりますので、縦断的なコンセンサスをとりながら準備を進めていきました。当社では、業務の質自体がIoTなどの技術に頼りたく

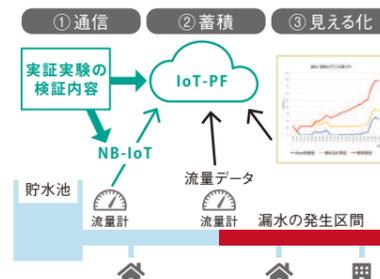


なるような種類のものであったことはアドバンテージといえますが、これからチャレンジを検討される企業様においては、トップマネジメント層と現場の新しい挑戦に対する共通認識の構築はとても重要だと思います。(村上氏)

IoT技術を活用し、広島ならではの課題解決を実現したい

島の多い広島県では水道管が区切られた場所が数多く存在します。このような場所には水を需要によらず送り続けなければならないというある種の無駄が生じます。電気のように、必要な量を必要だけ送る仕組みをつくることができると私たちの活動は広がりを待つのですが、そのために必要なものが整備された水道管なのです。(村上氏)

現在、水道管の老朽化は進行する一方で、更新が追いついていません。交換時期に該当する水道管は20年後には現在の約2.8倍(水みらい広島調べ)になると予測されます。しかし、少子高齢化の影響により水



道事業に関わる人員も減少傾向にあり、更新はますます追いつけなくなることが想定されます。老朽化による漏水は多額の損失となりますし、水が届けられないとなると、人々の生活に直接的な悪影響を及ぼします。特に広島では、島しょ部や山間地域といった遠隔地の管路管理がポイントになります。そこで、IoTを活用した水道スマートメーターにより、各地の水道管の水量をリアルタイムで監視・分析することで水道管の状態を効率的に把握し、無駄のない修繕対応をタイムリーに実現したいと考え、今回の提案を行いました。(妹尾氏)

失敗したからこそ、それ以上の気づきと経験が得られた

わたしたちの提案は、最終審査で惜しくも採択されませんでした。しかし、経営トップの判断により、自社の力で実現に向けてプロジェクトを進行していくことになりました。IoTという先進技術を利用した事業を推進するためには、若い世代の力は必須であると思います。そういう意味で、このようなチャレンジを検討することは、社内のリソースやアイデアが攪拌され、いわゆる組織の「洗濯」ができたのではないかと思います。例え落選したとしても、当社のように実業が抱える課題の解決策を提案することで、提案までに割いた時間や工数は全て実になっています。このように、ひろしまサンドボックスにチャレンジすることは、内部の活性化と事業の未来へ踏み出す一歩を一度に進められたというメリットの大きな取り組みになったと実感しています。(村上氏)

組織は元より、私個人にとっても大きな学びのある機会になりました。このような機会があることで、若い社員とのコミュニケーションが充実しましたし、この経験から他のプロジェクトに発展させられる視点や気づきを得ることができました。何よりも、IoTという言葉や概念はニュースや新聞で触れていましたが、「実際に自分でやってみる」という経験により深い理解を得ることができました。プロジェクトが採択されなかったということはある意味では失敗なのかもしれませんが、まさにサンドボックスという場で実験ができたことで、それ以上に得られるものがあったと思います。(妹尾氏)

取材協力

水みらい 村上氏、妹尾氏
(写真は、同社代表取締役社長三島氏、村上氏)

